

タイトル：2023年度 教育セミナー（第19回）

日時：2023年9月21日（木）～24日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所3階大会議室（303）

「オスマン朝支配初期エジプトのカイロ城塞-体制転換期における軍人・支配層とその生活世界」

森才人（早稲田大学大学院）

研究をしていると、「で、だからなんなの？それが分かって何になるの？」と果てなく言ってくる心のなかの自分がいて、ひどく疲れる。だから、ふつうに、已めてもいいのになとよく思う。学術研究など、問題に気づいた誰かがやればいいものだろう。

でもやっぱり、こういうものを面白いと思う時も少なからずあって、それは刹那的で、後でふりかえってみれば大したことではなかったと思うものがほとんどなのだが、よく考えてみると、研究を已めたいと思ったことは一度もない。

私が四六時中考えるのは、①何のために私は歴史を研究するのか？、②やるにしても、なぜオスマン朝期エジプト史なのか？、あるいはもっと現実的に、③現在利用可能な史料をもとに、いかなる研究の展開が見込めるのか？、といったことだ。3点目に関して、指導教官の教えでは、個別のテーマを研究していくにせよ、それぞれが大きな問題意識のもとで結びついていて、最終的に一つの作品になるよう意識する必要がある、とのことで、私の場合、問題意識があっても、史料状況との兼ね合いであんまり上手くいく気がしないというのが難点だった。これが将来的な史料との出逢いの前触れであればいいのだが。

そんなこんなで疲弊しているなか、本セミナーの初日を迎えた。同じように研究に向き合い、それぞれの仕方で悩んでいる人たちに触れ、パサついていた自分がうるおいを取り戻していく感じがした。だから、日が進むにつれ、かえって元気になった。同世代の研究者の卵たち、そして第一線で活躍する研究者たちの発表を一挙に味わえるのは、贅沢だと思う。私自身も発表の機会を与えられ、さまざま示唆的な質問や指摘を受けた。特に、かつて私に近いテーマで研究をしておられたという高松教授には「30年前の自分を見ているようだ」と親身なご助言を賜った。さらに発表後には、研究テーマの異なる方に後ろから呼び止めていただき、「面白かった」と言ってもらえた。ほんとうに参加してよかったと思う。そのお返しとして、私が書いたことや言ったことが、他の方々に対して、何かポジティブなものを与えられているよう願うばかりである。

さて、研究というのは膨大な時間のかかる作業で、受講生や先生方のレジュメの文章ができるまでの時間の総和を考えると、貴重な経験をさせていただいたと思っています。おそらく文章のみならず、報告時の発言や質疑応答時のコメントなども同じでしょう。そこに凝縮された時間をとても楽しみました。最後に、今回セミナーに携わってくださった全ての方々へ感謝申し上げます。本セミナーの終わった翌日には一種の喪失感を覚えるほどに充実した日々でした。